

ストライク・ザ・ブラット～氷結の侍～

猫又侍

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

”絃神島” 東京の南方海上三百三十キロ付近に浮かぶ人工島。島全体が”魔族特区”に指定されており、絶滅の危機に瀕している魔族の保護とともに、彼らの肉体や特殊能力に関する研究が行われている。

その絃神島には、ある噂が存在した。

”真祖”闇の血族を統べる帝王。もつとも古く、もつとも強大な魔力を備えた”始まりの吸血鬼”。公式に認められている真祖は三名だけで、三つの大陸に、それぞれの自治領である”夜の帝国”を築いている。四番目の真祖は、本来は存在しないはずなのだが――

”第四真祖”――それは伝説の中にしか存在しないはずの世界最強の吸血鬼。

十二体もの眷獣《けんじゅう》を従え、

災厄を撒き散らすといわれる幻の吸血鬼が、絃神島に出現したという。

そしてもう一つある噂が流れていた、とある一国をたった一人で守り抜き、英雄と称えられるもの、その姿は誰にも分からず、分かる事は”氷の刀を持つ侍”と言う証言が多く人々の間ではこう囁かれていた。

”氷結の侍”

その氷結の侍もまた絃神島にいます…

目次

第1章 聖者の右腕編

聖者の右腕 I | 1

聖者の右腕 II | 9

聖者の右腕 III | 13

聖者の右腕 IV | 22

聖者の右腕 V | 29

第2章 戦王の使者編

戦王の使者 I | 35

戦王の使者 II | 41

戦王の使者 III | 48

戦王の使者 IV | 55

戦王の使者 V | 61

戦王の使者 VI | 66

第1章 聖者の右腕編

聖者の右腕 I

”絃神島” 東京の南方海上三百三十キロ付近に浮かぶ人工島。島全体が”魔族特区”に指定されており、絶滅の危機に瀕している魔族の保護とともに、彼らの肉体や特殊能力に関する研究が行われている。

その絃神島には、ある噂が存在した。

”真祖”闇の血族を統べる帝王。もつとも古く、もつとも強大な魔力を備えた”始まりの吸血鬼”。公式に認められている真祖は三名だけで、三つの大陸に、それぞれの自治領である”夜の帝国”を築いている。四番目の真祖は、本来は存在しないはずなのだが――

”第四真祖”――それは伝説の中にしか存在しないはずの世界最強の吸血鬼。

十二体もの眷獣を従え、

災厄を撒き散らすといわれる幻の吸血鬼が、絃神島に出現したという。

そしてもう一つある噂が流れていた、とある一国をたった一人で守り抜き、英雄と称えられるもの、その姿は誰にも分からず、分かる事は”氷の刀を持つ侍”と言う証言が多く人々の間ではこう囁かれていた。

”氷結の侍”

その氷結の侍もまた絃神島に在ると言う…

――

ピンポン♪

ドアの方から軽快なインターホンの音が聞こえる。

「うーい」

ガチャ

ドアを開けるとそのには、白いパーカーを着た青年あかつき 古城こじょうがいた。

「よっ、おはよう洗夜」

古城から洗夜と呼ばれる青年いとがみ 洗夜こうやは頭を掻きながら出てきた。

「ん、今日は珍しいな古城、お前がこんな朝早くに家に来るの」

「うるせえ！コツチだって早起きの一、二回位するわ！」

そう言いながら古城は俺に怒鳴りつけてくる

「まあ、えらい事で流石天下の”第四真祖”様ですな」

そう、コイツ暁古城こそがあの噂の第四真祖なのである。

因みにコイツが第四真祖って知ってんのは俺と後もう一人だったかな。

「それを言うのはやめろ！ほかのやつに聞かれたらまずいだろ！」

「へいへい、分かりましたよ〜」

「絶対分かってないだろ！」

「チツ、ほらさっさと飯食えよ風沙ちゃん先行ったんだろ？」

そう言いながら俺は古城に朝飯を出す

「今舌打ちしたよな?!」

「… してない」

「んじや今の間はなんだよ！」

なんでいつもコイツは声がデカいんだ全く

「サツサと食えよ、俺は準備できたかな」

「お、おう悪いな」

「ま、コツチも迷惑かけてるしお互い様だ」

言ってみれば俺は古城となんらかの腐れ縁があった。

と言うよりも親同士が知り合いだったのだ。

「まったく牙城さんも何で俺とお前を知り合わせたのか未だに分からんな」

「まあ、あの人は何考えてんのか分からんな… ほれ、俺も準備終わったぞ」

そうして俺らは家を出た。

俺達は古城の追試があるためオレともう二人、藍葉あいは 浅葱あさぎと矢瀬基樹やせもとと、追試の手伝いをしていた。

「かつたりい……なあ、なんで俺は夏休みにこんな大量の追試を受けなきゃならねえんだろうな？」

と愚痴を言う古城。

「嫌々、あんだけ授業サボっておまけにテストまで欠席しといて何では無いだろう古城」

と、すかさず基樹のツツコミが入る。

「そうだぞ、古城流石にテストまで欠席するとは俺も思ってたぞ」

俺は呆れたような声を出して古城に言う。

「アレは不可抗力なんだよ」

と必死に弁解してくる古城。

「お？」

「ほう、不可抗力とは？」

俺と基樹が問いかける。

「俺にも色々事情があつて……」

「今の俺の体質じゃあ朝一のテストが無理って分かってんのにあの担任は……」ボソ

「？」

そりやそうだわなあ、古城実際吸血鬼だから朝弱いもんなあ、ザマアw

「朝起きれないって体質の問題？吸血鬼でもあるまいし……」

「うっ」

いつも思うんだが、浅葱ってなんでこう勘が良いんだか……

「だよな、は、はははは」

おい古城顔が引きつってるぞ。

「あつはつは、二人とも寄って集って古城を弄るなよ、コイツ顔引きつってるぞ」

俺は笑いながら浅葱と基樹に言う。

「まあ、そんなあんたを哀れだと思つてこうして勉強見てやつてるんだから感謝しなさいよ」

「人の金でこんなな飲み食いしてそんなに恩着せがましい事言うか?!」

「?別に言うくね?」

「お前もどさくさに紛れて食うな!」

と、俺に向かつて古城が言ってくる。

「別に良いじゃん減るもんじゃ無いし」

「俺の財布の中が減るんだけど?!」

「まあ、そんな事置いといて」

「置いとくか!」

さすが古城、ツツコミの速度が高いな。

「一応言っておくがその金かしたの俺だかな、ちゃんと返してくれよ、古城」

「え?マジで?おいおい古城、基樹から金巻き上げたのか?そろそろ本格的にヤバイぞ?」

「う、うるさい!分かってるよ、チクショウ」

と見栄を張るがかなり落ち込んでいるな。

「はあしようがない今度何か奢つてやるよ」

「マジか!ありがとな洗夜!」

コイツ一気に活力戻しやがったな…

「ま、日頃の礼とでも思つて居てくれ」

すると浅葱が立ち上がって帰る準備をする。

「どうした浅葱もう買えんのか?」

「違うわよ、バイトよバイト」

「あくそっういえばお前機械にめっぽう強いもんな」

「ただあんたが弱すぎるのだけだと思っうけど」

すぐに言い返される俺、流石浅葱だな。

「んじゃ俺も帰りますか、宿題写し終わつたし、浅葱が居なきやこんな所で勉強しても意味ないだろ」

「あつ」

「それじゃあな古城、洗夜」

「おう、またな」

そそくさと帰る二人

まあ、そうなるわな

さては、古城はめられたな。

「はあ、やる気無くすぜ…」

「じゃあ無い、少しだけなら教えてやる」

「お？マジか？ありがとな洗夜！」

「ほんじゃサツサと終わらせて帰るぞ」

そして俺は古城に勉強を教えながら自分の勉強も終わらせた。

「ありがとうございました〜」

店を出る俺と古城

「結構進んだか？古城」

「ああ、洗夜のお陰で大分進んだよありがとな、本当に」

「そりやどうも」

それにしても暑い流石常夏の島こりや干からびてもおかしく無いな。

「暑い、焼ける、焦げる、廃になる」

と、四重苦を重ねる古城。

「おい、辞めろ古城コツチがもつと暑くなるだろうが」

「いや、無理だろ、こりや」

まあ、そうかさっきの食事代でモノレールに乗る金すら残っていない。

「てかお前財布持ってないのかよ」

「？いや、家に置いてきた」

「何でだよ！」

いや、基樹に財布いらねえって言われたからなんだが、それを言ったら俺が基樹に基樹が古城に殺されかねない。

「まあまあそんな事言わずに…?」

「?どうした洗夜」

「誰かにつけられてるな」

「?何だお前も気づいたのか」

おい、もつと先に言えよ、コツチが困るだろ

「それにしてもアレで隠れてるって思ってたんのかね」

「まあ、思ってたなきややらんだろ」

「それもそうか」

てか完全にチョツ●ーなんだが…

「どうする洗夜」

「とりま様子見るか、そして手頃な所に逃げる」

「手頃なつて何処だ?」

「この先にゲーセンがあるそこで良いだろ」

まあ、おつてな事は確かだなあ、ま、面倒くさいことにはならんでくれよ、こちとら疲れのんねん。

ま、善か悪かで決まるだろうな。

「そうと決まれば行くぞ古城」

「ああ、わかった」

—————

数分後

「… まだ追ってくるか」

「おい、何なんだ一体」

絶賛今ゲーセンに向かっている途中なのだが、さっきのストーカー?は未だ付いてきている。

「さあな、多分俺の予想だと古城、お前の正体を知っている人間かもしれない」

「は?!何言ってるんだよ!俺の正体知ってるんのか洗夜と那月ちゃんぐらいしかいねえだろ」

「さあな、そこがイマイチ分からん」

ただまあ、こうやって見ると明らかに古城見てんな。

十中八九古城の正体知ってるな。

そう考えているとゲーセンが見えてきた。

「よし、古城中入るぞ」

「あ、ああ」

俺達がゲーセンの中に入ると一人の女の子が駆け込んできた。

ん？あの制服、うちの学校の中等部の制服だよな？

まさか……な

「なあ、なんか悪い気がするんだが」

「しようがないだろ、古城お前が付けられてるって相当怪しいぞ？」

「そりやそうだけど」

「はあ、まあ良いサツサとここから出るぞ」

そうしてゲーセンから出ようとした瞬間。

「あっ」

そこには俺と古城を付けていた女の子が居るではありませんか。

「!第四真祖!」

あっ、やっぱ古城の正体知ってんのね

「おい、どうする古城」ボソ

「どうするったって……おい良い考えがある」ボソ

「おし、今回はお前を信じよう」ボソ

「よし、行くぞ」ボソ

「オウ、ミデイスピアーチェ!アウグーリ!」

「は?」

「ワタシ、通りすがりのイタリア人です。日本語、よく解りません。ア

リヴェデルチ!グラツチエ」

そうだ忘れてたコイツ筋金入のバカだった。

はあ、しようがない

「せい!」

「ゴフウ!」

「少し大人しくしとけこのバカ」

そう言いながら女の子に向かって言う。

「ゴメンなこのバカのせいで迷惑かけて、後その第四真祖っての多分人違いだ、他を当たってくれ」

「え？あ、ちよ！」

大分慌ててるがなんとかまけそうだな。

そうして俺たちは近くの物陰に隠れる。

「おい洗夜！本気で腹パンする事は無いだろう！」

「済まんな、こうするしか手段は無かった」

「はあ、お？出て来たぞ」

女の子がゲーセンから出て来たと思った瞬間

速攻でナンパされていた。

「うわ、早！ナンパされんの」

てか相手D種やんけ眷獣出されたら”聖域条約違反”になるぞ

こうして俺と古城は女の子を少し見ることにした。

次回 聖者の右腕Ⅱ

聖者の右腕Ⅱ

「ほう、これは中々」

「何変な事言っただ洗夜」

俺と古城は女の子が、ナンパされているところを監視していた。
勿論バレない程度に。

「いや、別に良い筋してんなーと思って」

「まさか洗夜あの子に手出すつもりじゃ…」

「お前は何考えとんねん！戦い方だよ戦い方」

俺は古城に呆れた顔で言う。

ホントこいつバカとしか言いようが無いな。

それにしてもあの動き…

「獅子王機関の奴か？」ボソ

「なんか言ったか洗夜？」

「いんや、何でもない」

だとしても獅子王機関が何故ここに？まさか古城を殺そうとなん
てしてないだろうな…

「そうか…っっておい！あれ見ろ！」

「ん？アレは…」

「明らかに眷獣だな」

「そろそろヤベェんじゃねえか？」

確かにヤバいが…ここは獅子王機関のお手並みを拝見と行こ
うじゃ無いか。

「ちよつと待て」

「なんだよ洗夜」

「もう少し様子を見るぞ」

「何言っただおm」流石にヤバくなったら間に入るさ、だから安心し
とけ」あ、ああ」

さてと獅子王機関のお手並みは如何に…

「っ！若雷（わかいかずち）！」

「くっ！コイツ攻魔師か！」

「おやおや、獅子王機関のお人さん少しやり過ぎては？」

そう考えていると、後ろのギターケースから武器を取り出した。

「アレは！」

「どうかしたのか？」

「……いや、何でもない」

「アレはまさか」七式突撃降魔機槍「シユネーヴァルツァー」獅子王機関め、寄りにも寄ってアレを出してくるとは。

「つてヤバい！」

流石にあれを食らったらいくらd種でもひとたまりもない。

「雪霞狼（せつかろう）！」

俺はすかさず獅子王機関の物がシユネーバルツァーを振りかざそうとしている所に割って入る。

「そこまですだお前ら」

「っ！」

D種の奴らも大分驚いているが、今はそんなものは関係ない。

兎に角コイツらを逃がさないと殺られちまう。

「ホラ、チンピラども早く失せろ」

「あ、ああ恩にきる」

そうしてそこからD種のやつらを逃した。

ようし、これで少しはコイツも治るだろ。

「何故止めるんです！」

あつ、全然治ってなかったわ

「あのまま殺ってたらお前が捕まるぞ」

「公共の場での魔族化、しかも市街地で眷獣を使うなんて明白な聖域条約違反です。彼は殺されても文句を言えないはずですが」

「大丈夫だろう何のために魔族登録証が有ると思ってるんだ」

「そ、それは……」

「第一、お前がやったとしてアイランドガードに捕まるだけだと思っ
が？」

と、俺は頑張って説得する。

「分かって貰えたかな？」

「はい、分かりました」

うむ、分かってくれて何よりだ。

「ようやく終わったのか？ 洗夜」

「あ、ああ終わったぞ」

そういうえばコイツの存在忘れてたわ

「後一ついいか？ あいつらより手を先に出したのお前だろ」

「ま、まあそうですけど…」

「お前が何者なのか知らないけどちょっとパンツ見られたくらいでそんなもん振り回して殺そうとするなんてあんまりだろ。いくら相手が魔族だからって」

え？

「ま、まさか見たんですか？」

「え？ あ、いや…でも、そのほら」

「…もういいです」

あつ、やったな古城お疲れ

「いやらしい」

と捨て台詞を残してその場から離れていった

「お疲れ古城、お前が裁判に掛けられた時は証人になってやるよ…」

あの子の」

「いや、何でだよー！」

「まあまあそう怒りなさんな…ってコレは？」

そこには、財布が落としてあった。

「まさかさつきの子がっってもう居ないか」

「どうするんだ？ 洗夜」

「確かあの子はうちの学校の中等部の制服を着てたから明日にでも学校に届けに行くか」

うちの学校は彩海学園（さいかいがくえん）という場所である。

彩海学園とは、絃神市内にある中高一貫教育の共学校。市立。生徒数は中等部が各学年150人前後（5クラス）、高等部が240人前後（8クラス）の計1200人弱。そのうち魔族は50人弱。彩海学園には強力な（純粋な）魔族は少なく、留学生程度で普通の生

徒たちに溶けこんで生活している。授業のカリキュラムも本土の高校とほとんど変わらない。

「ま、そうか、那月ちゃんも居るしな」

「おう、って許可書が落ちちゃまったな。えっと、名前は……」

「姫柇雪菜（ひめらぎゆきな）……か」

こりやサツサと返した方が良いな……

こうして俺と古城は家に帰った

「あ、めっちゃ暑いのを忘れて走っちゃまった」

それに気づくのもそう遅くなく、後から物凄い疲労感が襲ってきたのはまた別の話

次回聖者の右腕Ⅲ

説明

七式突撃降魔機槍

「シユネーヴァルツァー」

全金属製の銀色の長槍。獅子王機関の秘奥兵器。神格振動波駆動術式を刻印されており、魔力を無効化し、ありとあらゆる結界を斬り裂く破魔の槍。魔族にとっては天敵ともいえる凶悪な武装であり、吸血鬼の真祖をも殺し得るといわれている。ただし武器の核として古代の宝槍の一部が使用されているため、量産が利かず、同種の武器は三本しか現存しない。変形機構を有しており、通常は半分以下の長さになり折り畳んで運搬される。

聖者の右腕Ⅲ

「なあ、洗夜」

「ん？何だ古城」

古城は朝っぱらからだらけた声で言う

もうちよいシヤキツとできんのか？コイツは

「何で俺達夏休みなのに学校来てんだ？」

「お前はアホか、昨日財布落ちてたから拾ってそれ見たらここの中等部の生徒だから届けに来たんだろうが」

全く、俺中等部なんて久々に行くぞ。

ま、姫終の担任に渡すのが一番良いつて事になったのは良いがめんどくさいなあ

その後俺と古城は中等部の職員室に行き姫終の担任に渡そうとしたのだが、不在。

仕方なく今日は帰ることにした。

「何でこんな時に担任が居ないかねえ」

「私がどうかしたか？」

「うわ！」

俺と古城の後ろにいつのまにか、身長が低く黒いドレスを着た少女（自称28歳）南宮那月（みなみやなつき）が後ろに居た。

「何だ那月ちゃんかよ…っって痛て！」

「教師をちゃん付けで呼ぶな」

もうコレで古城が叩かれるのを何回見たことか。

「それで、お前達中等部に何の用だ？」

「昨日財布を拾ってね、学生証がこの学校だったから届けようとしたら、先生が居なくてね」

「それでボヤいたってのにいきなり現れて扇子で叩くはないだろう…。」

うん、ドンマイ古城。

でもまあ、那月ちゃんはしょうがないよこう言う人だから。

「しようがないさ古城、だって那月ちゃんは、攻魔師だぜ？こんな事もおかしくないだろ？」

「まあ、そうだな」

すると那月ちゃんが呆れた顔でこちらを見る

何？俺なんか悪い事言った？

「…… まあ、事情があるなら良いさ」

「ありがとう那月」 暁、お前は追試が迫っている事を忘れるなよ？」
は、はい」

「それでは私は仕事があるのでな… 後絃神」

ん？何だ？那月ちゃんが俺に用事なんて珍しいな。

今日は空から槍でも降ってくるか？

「へいへい」

「お前の”アレ”が届いている時間があつたら取りに來い」 ボソ

「お？そろそろって事か」 ボソ

ん？アレって何かってそれは読み進めて行けば分かるさ！

ん？メタいつて？知らんな

「それではな」

「さようなら那月ちゃん」

そして二人仲良く扇子で叩かれました。

—————

「しかしどうしたもんかね」

「だなあ」

どうすれば姫柎の財布を渡せるか古城と二人で思考錯誤を続けて居た。

「ま、考えて居ても仕方ない、古城何か飲み物買ってくるか？」

「ああ頼むわ」

俺は古城の分も買いに自販機へ向かった

「コレで良いだろう」

ピリリリ

「何だ？電話か……」

その電話の主は”アルディギア国王”

「はあ、何でこんな時に」

「…… もしもし」

「もしもし、私だ」

「こんな時に何でしょうか？ 国王様」

「済まん、こちら情報を手に入れてのだから？」

「情報？ 一体何の？」

「絃神洗夜、お前はクリストフ・ガルドシュを知っているか？」

「ああ、確か黒死皇派のボスが最近殺されたとかで新しく主導者として依頼された奴だろ？ そいつがどうした？」

「実は今絃神島に居るとの情報が入ったのでな」

何故こんな島に来る必要があるんだ？

クリストフ・ガルドシュ……か、今回の相手に不足はないってか？

「でも何故この島に？」

「ナラクヴェーラは知っているか？」

「確か、第九メヘルガル遺跡から発掘された古代超文明の遺産で、強大な攻撃力と学習による自己進化・修復機能を兼ね備えているって話のあのナラクヴェーラ？」

「そうだ、ガルドシュがそれを持って絃神島に侵入したらしい」

と言うことは目的はおそらく

「ナラクヴェーラの軌道と操縦か……」

「恐らくはそうだろう、それを伝えるために電話をしたのだが、済まない時間を使わせて」

「まあ、良い情報を貰えたので良いですよ」

「後、ラ・フォリアが会いたがって居たぞ」

「…… 他の人に名乗らせてくださいよ、俺の顔知ってんの国王様と女王陛下下ぐらいでしょう」

「それも行かなくてな「この人じゃない」とばかり言うのでな」

「はあ、機会があったらでお願いします」

「ありがとう」 氷結の侍 殿」

絶対狙って言ったな

「はい、それでは」

と言つて国王電話を切った。

「……今更どのツラ下げて会えば良いんだよ」

「おい古城戻ったぞ……つて何してんの？」

そこには鼻血を垂らす古城と姫柊が居た。

「この人が私の財布の匂いを嗅いで鼻血を垂らしました」

「ほう、古城まさかお前……」

「違う！コレは誤解だ！」

と必死に弁解する古城すると隣から

キュルルルと可愛らしい音が聞こえてきた。

隣を見ると顔を真っ赤にした姫柊がコツチを見ている。

「ま、まさか姫柊、お前昨日から何も食つてn「それぐらい察せバカ」痛つて！」

俺は空かさず古城の脇腹にチョップを入れる

「ホラ、サツサと返してやんな」

「分かつてるよ」

と言つて財布を渡そうとする古城

「ありがとうございます……つてえ？」

すると古城は直ぐに財布を戻す

「何やつとんだ古城」

「まあ、な」

「？」

「財布を拾った奴に少しの謝礼ぐらいないとな」

「はあ……お前つて奴は」

「コイツ、自分の金が無いからつて姫柊に払わせようとしてやがる。

「よし、ほんじゃ俺が奢つてやろう」

「お？まじー！」

「その子の分だけ」

「何でだよおおおおおおおおお！」

そんなこんなで俺達はマ●クに来ている。
え？マイクにしか見えない？知らんがな

マ●クはマ●ク何だよそれ以上でもそれ以下でも無い。
それにしても……

モグモグモグ

「よく食べるねえ」

「あっ！すみません奢って貰ってるのに……」

「はっはっは！良いよ良いよたくさん食べて貰っても、俺貯金たまり
すぎてどう使うか迷ってたから」

「にしては俺には奢ってくれないのな」

「はあ、しょうがないコレ食え」

俺は拗ねている古城に渋々俺のハンバーガーを渡した。

食べかけじゃ無いよ？流石にそんな事するわけ無いだろw

「良いのか？食っても」

「食わないんならやらんぞ」

「悪い悪い！食べる、食べるから！」

サツサと正直に言えば良かろうに、コイツは素直じゃ無いねえ。

「あ、あの……」

「おう、済まんね自己紹介が遅れた、俺の

名前は絃神洗夜、まあ洗夜とでも呼んでくれて構わない、コイツと
は親が知り合いでね、まあ言う所のく腐れ縁って奴だ」

「俺は何で知ってるか分からんが暁古城だ」

「私の名前は姫柊雪菜と言います、よろしくお願します」

な、何て律儀な女の子なんや！コイツ（古城）とは大違いや！泣け
る！泣けるで！

「おうよろしく姫柊」

「よろしくな姫柊」

「はい！よろしくお願します暁先輩、洗夜先輩！」

「アレ？何で俺だけ苗字」

「それは、多分俺は絃神島とほぼ見分け付かんからの話だと思うがな」
と古城と駄弁って居るが、実際俺の事を名前で呼んでくる人は結構

いる。

その理由の大半が絃神島とほぼ見分けが付かないからとの事

「ところで姫終さんや」

「はい、何ででしょうか洗夜先輩」

「一応聞いておくが、あんた何者だ？」

「っ！何でそれを？」

「嫌々、そんな女の子が獅子王機関の秘奥兵器で神格振動波駆動術式が埋め込まれて居る」

七式突撃降魔機槍シユネーヴアルツアーなんてもん見せられたら驚くわ普通」

「なっ、何でコレを知って居るんですか！」

「いやね？仕事の都合上聞いたことがあるだけだが、その槍神格振動波駆動術式が見えたもんでねそれで判断したよ」

姫終がこちらを怪しそうに見て居るがやがて諦めたのか、その怪しいものを見る目を辞めてくれた。

「私は獅子王機関の劍巫です」

「ほう、劍巫とは驚いた」

「なあ、獅子王機関って何だ？」

「古城が知らなくて当然だな」

「仕方ない、”獅子王機関”「ししおうきかん」国家公安委員会に設置されている特務機関。大規模な魔導災害や魔導テロを阻止するため、情報収集と謀略工作が主な任務。また平安時代に宮中の靈的守護を担当していた滝口武者を源流として居るため、現在でも要人の警護を行うことが多い。劍巫や舞威媛などの攻魔師を内部で養成しているほか、七式突撃降魔機槍などの武神具の開発も行っている。」

ま、こんなところかなって待って待って姫終さん、何でコツチを見れるんですか？

怖いですよ？

「世間では高神の杜で通って居るのに、何故洗夜先輩は裏の獅子王機関を知って居るんですか？」

「だから言っただろ？都合上って」

「それにしても不自然です！そこまで詳しい人は見たことが有りません！洗夜先輩は一体何の仕事を「まあまあその内知る事になるからそれまでは内緒で」っ！わ、分かりました」

「うん、宜しい」

ホントこの子ええ子やな

「つとここで本題だ、姫終は何故古城を尾行と会うには余りにもバレて居る事をして居たんだ？」

「うっ、それは……」

ありや、尾行の事はダメだったか

「暁先輩には、監視の為に来ました」

「は？何で俺なんか監視が？」

「先輩は、社会的からすると、核兵器とかと同じような扱いなんです、だから獅子王機関から私が来て、監視をする事になりました」

ドンマイ古城（　ω　）俺はこれしか言いようが無いよ

「はあ！何で俺は生物扱いされないんだよ！」

「あつ、そこきにするのね」

「ところで洗夜先輩、先輩はこの島に自分の帝国（ドミニオン）でも築くつもりなんですか？」

「ん？まあ、そうだな」

「おい！そこは否定しろよ！ま、待ってくれ！目的も何も俺が第四真祖になったのは今年の4月でそんな事考えてない！」

まあ、そうだな実際久し振りに会ったらもう既に第四真祖だったしな

「う、嘘です！人間が急に吸血鬼になんてまして真祖になるなんて聞いたことはありません！そんなの「喰ったも何も俺はただあのバカに押し付けられただけだ」

「誰ですか」

「先代の第四真祖だよ」

「先代の第四真祖！焰光の夜伯（カレイドブラッド）ですか!？」

「ああ、迷惑な話だぜ」

そのお前と居る俺も迷惑して居るんだが？

「なんで先代の焰光の夜伯が先輩を後継者に…先輩は知り合いなんですか？」

「姫柊が、そう聞くと古城は顔を歪め苦痛に耐えるように頭を抱える。」

「…!?悪い姫柊…おれにはその時の記憶が…無いんだ」

おいコツチを見るな姫柊さんや

「済まんな俺もその時実家に帰省していて帰ってきたらこの通り、古城が第四真祖になったって訳」

「…そうですか」

ねえ、何でそんなにしょんぼりするの？

周りの目線が痛いからやめて下さいお願いします

「獅子王機関からは、害が有ると思えば抹殺して良いと言われていましたが、先輩はそれ程酷い人とは思えないのでこのまま監視を続けます」

「おう、それは良かったな古城」

「良くねえよ！何で俺は殺されて良い命令があんだよ！」

あつ、やっぱそこなのね

まあ、そこからは雑談だの何だのしてお開きになった

帰宅後

「ふい〜じや、また明日な古城、姫柊ちゃん」

「ひ、姫柊ちゃん？」

「古城も姫柊だし俺もそれだったら読者も読みにくいだろ？」

「ここに来てのメタ発言辞めろ」

「ま、まあ事情は分かりましたそれでは」

とお辞儀してくる姫柊ちゃん

「あ、どうせなら雪菜ちゃんでもいいか」

「はい、その方がしつくり来るかと」

「ほんじゃまたな〜」

古城が住むアパートの部屋の前

ガチャ

「姫柊、アパートの部屋も隣なのか」

「ええ、監視役ですから」

次回 聖者の右腕 IV

説明

劍巫

「けんなぎ」

獅子王機関に仕える攻魔師。劍を扱う巫女という程度の意味。一瞬先の未来を見る霊視を得意とし、優れた戦闘能力を持つ。主任務は単独での魔族・魔獣の撃破。その数は非常に少なく、現役の劍巫は雪菜を含めて三十名に満たない。

聖者の右腕Ⅳ

「辞め」

静寂の中、教室の中に響く那月ちゃんの声

「あく終わった〜」

「…… よし、今回はこれくらいで良いだろう」

「お？終わったか古城」

俺は暇なので古城の追試について行つた

「それにしても、良かったな古城これくらいで済んで」

「ああ、そうだな…… そういえば那月ちゃん」

「先生をちゃん付けて呼ぶな」

ヤベエ、那月ちゃんの後ろから黒いオーラ出てるわ

因みに今頃だが、那月ちゃんは俺の他に古城の体質を知る唯一の人物だ

「那月ちゃ…… 先生、獅子王機関って知ってますか？」

「！おい暁それをどこで聞いた！」

凄いい形相でこちらに詰め寄ってくる那月ちゃん、こりやまずい事になったな。

「い、いやちよつと小耳に挟んだつつうか」

「…… はあ、しょうがない…… 教えてやる。あいつらは国家攻魔士としての私の商売敵だ。それにあいつらは暁古城、お前の天敵でもある。精々出くわさないようにするんだな」

ヤベエじゃん、出くわす以前に既に監視されちゃつとるやん

そう危機感をい抱かざるを得なかった俺であった。

—————

次の日古城は他の追試があるようで学校に行つて居る。

え？俺は行かないのかつて？俺も行ったらやらされるから嫌だ。

「それにしても暇だから、本でも読むか」

数時間後

「ふい〜これくらいでいいかな」

ちようど俺が本を読み終わったその時

ドオオオオオオオオオオオオオオオオ！

「うわ！な、ナンダア？」

思わず変な声出しちゃまったじゃねえか

「あっちは倉庫の方か……見に行ってみるか、あつ、その前に」

プルルル

「あ、もしもし那月ちゃん？あれ取りに行きたいんだけど、分かったすぐ行く」

俺は黒い”死覇装”を来て家を出た

—————

その頃姫柊達は

そこには姫柊と一人の男が立っていた。

「その槍、七式突撃降魔機槍（シユネーヴアルツァー）ですか。神格振動波駆動術式と呼ばれる魔力無効化術式を組み込まれている。よもやこんなところで見られるとは」

「いいでしょう娘！このルドルフ・オイスタツハ、ロタリングアの殲教師の名において貴女の相手をしましょう」

姫柊は譜を唱えると素早い動きで槍を相手に向け攻撃をしかける。

「なんとというパワー……それにこの速度！ 成る程、これが獅子王機関の剣巫ですか！」

「やりなさい！アスタルテ！」

すると殲教師の背後から青い髪の女の子が出てきた。

「命令受諾（アクセプト）。執行せよ（エクスキュート）、薔薇の指先（ロドダクテユロス）」

アスタルテはでかい脊獣の腕を出し姫柊を襲うが槍で相殺する。だがアスタルテが奇声を上げると腕をもう一つだし姫柊を襲う。

「しまっ!？」

姫柊がそう叫び介入しようとする一人の人物が出てきた。

「姫柊いいいい!!」

古城が叫びながらアスタルテの腕を殴り飛ばし姫柊を助けた。

「先輩！なんで!!」

「お前が心配だからにきまつてるだろ姫柊。それであいつらはなん

だ」

「ロタリンギアの殲教師と名乗っていますが目的がわかりません」

「姫終がそう言う」と古城は姫終の前に立ち相手の二人を睨みつける。

「ほう、いい目だ。それに先程の魔力……只の吸血鬼ではありませんね。貴族と同等かそれ以上……。まさか、第四真祖の噂は事実ですか？」

「なあおっさん、悪いけど引いてくれねえかなあ」

「引けません。我々の目的には膨大な魔力が必要なのです」

「さあ、喰らいなさい！」

そうしてオイスタツハが武器を振りかざそうとした瞬間

ガキン！

その瞬間オイスタツハの武器が弾かれた

そこには黒い死覇装を着て、刀身の長い刀を持っている洗夜が居た

――――

「洗夜（先輩）！」

「済まん少し遅れた」

「何者ですかあなたは！」

俺はオイスタツハに向かい合わせになる

「なあに、名乗るほどのものたでも無いさ」

「ですが、貴方は私の武器を弾いた、それは即ち、貴方は魔術師！」

「残念」

俺はオイスタツハの懐に潜り込もうとする

「アスタルテ！」

「ちい！」

すると目の前にホムンクルスが立ちはだかる

「しょうがねえなあ、こんな所で使う気は無かったんだが」

「おい、何をする気だ洗夜！」

「まあ、見てなって古城」

俺は刀に力を込める

「はあ！」

「その尋常では無い何か、貴方やはり！」

「だからちげえって、強いて言うならそうだな、氷結の侍とでも名乗って置こうか」

「何×氷結の侍！」

「まさか！アルディギア王国を千もの兵隊を一人で相手をし、守り抜いた伝説の英雄、氷結の侍！まさか洗夜先輩がそうだったなんて」

驚いているようだが、まだまだだな

「だから言っただろ雪菜ちゃん、いずれ分かるって」

「そうですね、貴方が氷結の侍、相手にとって不足なしという事ですか、アスタルテ！」

するとオイスタツハが後ろのホムンクルスに命令する

「命令受諾(アクセプト)。執行せよ(エクスキュート)、薔薇の指先(ロドダクテユロス)」

「お前ら俺を甘く見過ぎだ」

「なっ！」

俺は一瞬にしてオイスタツハの目の前に接近する

「姿が見えない……まさか、空間制御魔法だと×」

「違うな、ただお前達が”捕らえられていない”だけだし、空間制御魔法でも無いコイツは”瞬歩”って言ってな、高速で移動する事に寄って、あたかも消えたように見えるだけさ」

そう悠長に話していると後ろからホムンクルスが攻撃してくる

「洗夜！」

「だから、俺を甘く見過ぎだ」

俺は軽々とホムンクルスの攻撃を避ける

「しようがない、折角手加減してやったのに、ここまでやらせるとはな」

「さあ、貴方の力を見せてください！氷結の侍！」

「そこで一つ筆問だ」

「？」

「今ここで死ぬか、地獄に落ちるか選びな」

「！」

何ビビってんだコイツ？

手加減してやってる人の優しさを受け取らないでいるからこうなるんだ

「お前らが言う魔力とは俺のは違って居てね、”霊圧”と言うんだがそうだな、例えるなら真祖と同じ魔力だと思ってもらっている」

「なっ、真祖と同じだと!」

「さてここでもう一度質問だ、今ここで死ぬか、地獄に落ちるか選ぶな」

するとオイスタツハはホムンクルスに向かって命令する

「アスタルテ!ここは一先ず撤退です」

「了解」

ホムンクルスは眷獣を使い、穴を開けて逃走した。

「ま、賢明な判断だろうな」

「だ、大丈夫か!洗夜!」

「おう、大丈夫だ」

すると雪菜ちゃんが寄ってくる

「まさか、洗夜先輩が氷結の侍だったなんて」

「辞めてくれ、その呼び名は俺には相応しくない」

「なあ、氷結の侍って何だ?」

「先輩知らないんですか?数年前、誘拐され殺されたアルデイギアのお姫様を助け、そして相手は千もの兵隊にも関わらず、それを一人で戦いアルデイギア王国を守った英雄ですよ?ですが誰もその姿を見た事はなく、唯一分かるのが、氷の刀を持っているという証言が多いため、氷結の侍と名付けられてんです」

「ほおよく知っているねえ」

「って何で今まで黙ってたんだよ!」

そんなに努力つけなくてもいいじゃないか、まあ、教えてない俺も俺なんだが……

「まあ、そう言うなよ、実はコイツが届いて無かったもんでね」

「ん?ああ、その刀か?」

「そ、俺の相棒”氷輪丸”コイツを修理に出してたもんでね」

「だから洗夜先輩はそれまで何も持っていなかったと?」

「ご名答」

「でも第四真祖レベルで珍しいですよ？氷結の侍って」

え？…そうなの？…いつの間にそんなランクが上に… まあ、いつか帰って飯食お

「そろそろアイランドガードがくる頃だ、逃げるぞ」

「ああ（はい）！」

次の日俺と古城と雪菜ちゃんが職員室に呼び出された。

ヤベエ心当たりねえ… 裁かれない事を願うか。

「お前達を呼んだのは昨日の件についてだ。アイランド・イーストで騒ぎが起きたのは知っているな？」

「ええまあ、応戦しましたし」

「実はそれ以外にもここ最近、吸血鬼を狙った事件が同じ事件が多発している。今回で7回目だ」

事件の資料をみせられた時、姫柊をナンパしてきた二人組の写真が出てきた。姫柊と古城は驚きの顔をしている。

「お前達を呼び出したのはこれが理由だ。暁古城、お前は第四真祖の吸血鬼だ。狙われる可能性が高い。十分気をつけるんだな」

「分かったよ、那月ちゃん」

だが後から古城が付けたす

「でも、そろそろ俺も我慢の限界ってもんがあるからな、少し暴れるかも知れない」

「そこは自分で何とかしろ」

と那月ちゃんからのきつい一言

「まあ、やるだけやってみるさ」

そう古城が言うのと部屋を出ようとするが姫柊が那月ちゃんに呼び止められ那月ちゃんは何かを姫柊になげ渡した。

「!?ネコママたん」

「お前の物だろう」

よおしく帰ってゲームでもs「あと、絃神は少し残れ」

「… 因みに拒否権h「そんなものお前にあるとでも？」あつハイ」俺本当に裁かれるかも知れねえなw

その時は皆んな遺骨を拾ってくれよな！え？気持ち悪いからヤダ？皆んな扱い酷くないですかね？ね？

「おい、絃神洗夜」

「は、ハイ」

「お前…」

あつ、終わったなこれ、人生終了のお知らせやん。

「霊圧の出し過ぎだ、少しは抑えろ」

「え？」

「聞こえんのか？霊圧の出し過ぎだ、お前の霊圧は、魔力と違って出しすぎると人によっては体に害があるかも知れんからな、あとは処理が面倒くさい、コッチの都合も考えろ…： 隠しきれる限度があるからな」

OU以外と真面目な話だった、良かったああああ普通の話で、死なずに済んだわ。

「分かったよ那月ちゃん」

「教師をちゃん付けで呼ぶな」

その瞬間珍しく扇子ではなく目潰しがきた。

「目がああああああああああああああああああああ！」

その日男子生徒の悲鳴が校内に響き渡った。

次回 聖者の右腕V

聖者の右腕Ⅴ

彩海学園最上階

俺はある人に会うためにここにきた。
のは良いんだが…

「何で那月ちゃんの部屋が理事長の階の上の階何だよ、那月ちゃん偉いのは知ってるけどここまで偉いと流石にな…。」

そう愚痴を言いながらドアノブに手を掛ける
そしてノックを三回する。

すると中から「入って良いぞ」と言う声が聞こえてきたので俺はドアを開ける。

「来たか絃神」

「そりやな…んで、何か情報は？」

「掴んで無ければ此処には呼ばん」

デスヨネ

俺はちようど那月ちゃんにオイスタツハの居場所を探してもらって
いて、つい先ほど連絡があり、此処にいると言うわけだ。

「んで、何処に奴等は居るんだ？」

「ああ、その事なんだが、奴等は…。」

ピリリリ

「あ、もしもし浅葱か？」

「あつ、洗夜？あんた今何処に居るのよ」

「済まんな今日は用事があつてな、それより浅葱、ちよつとロタリング
アの運営している会社を調べて貰いたいんだが」

「え？それなら古城から調べろつてお願いされたから調べてる
けど…。」

アイツ、また何かやろうとしてんじやないだろうな…
そう思ったその時

ドオオオオオオオオオオオン！

「なつ、何だ」

「ちよつと嘘でしょ☒」

「どうした浅葱!」

「キーストンゲートに侵入者が出たみたい。それも二人でどんどん奥に進んでアンカーブロックに向かつてるみたい」

オイスタツハめ、何を考えている……

だが、分からんな… 確か彼処にはこの島の衝撃などを耐える鉄の塊しか無いぞ?」

「浅葱、その奥に何かがあるか調べてくれ!」

「はあ、どいつもコイツも人使い荒いつて」

「仕方ないだろ、緊急事態なんだから」

「分かったわよ…… ってえ☒」

「ま、あとは任せたぞ」

そう言いながら電話を切り走り出す。

「来い! 氷輪丸!」

すると空から氷輪丸が降ってくるが、それをキャッチしながら瞬歩で進む

「古城、頼むからもう少し持ってくれよ!」

こうして俺は急いでキーストンゲートに向かった。

—————

キーストンゲート内部

「こりゃ酷いな……」

見ているだけでも吐き気がするぐらいの死体が転がっている。

あとで那月ちゃんに頼んで色々やつてもらわなきゃな。

「つと、着いたぞ…… 中はどうなってるんだ?」

そつと影から覗くと其処には、オイスタツハと、それに対峙するように立っている古城と雪菜ちゃんが居た。

「おっさん! アンタの目的はそれだったんだな。西欧教会に仕えた聖人の遺体、聖遺物って言うんだってな。これがアンタの目的だったわけだ」

「貴方たちが絃神島と呼ぶこの島は龍脈の上に都市を設計し、4つのメガフロートをも四神に見立て龍脈の力を得ている。しかしそのため

にはどうしても解決しなければならぬ問題があった」

「要石の強度だな」

「そうです。島が設計された当時、四神の長たる黄龍の役割を果たす強度の建材を作り出すのは不可能だった。そこで島を支える人柱として選んだのが西欧教会から奪略した聖人の遺体だったのです！決して許されることではありません！故に私は力を持ってこれを奪還します！立ち去るがいい第四真祖！これは聖遺物かけた聖戦です！」

「だからってこの町に住む56万人が死んでもいいってのかよ！」

「この島の償うべき対価に比べたらそれぐらいの犠牲一顧だにもする価値がありません！」

「現在の技術を使えば人柱を使わずとも必要な強度の要石を作ることでも可能です。訴え、返還を要求すれば」

「貴女は聖遺物を奪われ虐げられている人達にも、同じことが言えるのですか！もはや言葉は無用！アスタルテ！」

「命令受諾（アクセプト）」

そう言うのアスタルテは己の眷獣を使い攻撃体制に入る。

「あなたには胴体を切られた仮があるんだ。さあ、決着をつけようぜ。ここから先は俺の喧嘩だ！」

そう言うって攻撃に出るが姫柊が前に出て雪霞狼を振り下ろし古城に言う。

「いいえ先輩。私達の喧嘩です！」

古城や姫柊の様子を見て殲教師も本気を出す。

「ロタリングアの技術によって造られし聖戦装備”要塞の衣アルカサバ”——この光を持ってわが障害を排除する！」

その装備は輝かしい光を放ち古城たちを威嚇する。

「オッサンがその気なら、こちらも遠慮なく使わせてもらうぜ。焰光の夜伯（カレイドブラッド）の血脈を継ぎし者、暁古城が、汝の枷を放つ。きやがれ！五番目の眷獣、獅子の黄金（レグルスアウルム）！」

そこに現れたのは電撃を纏った獅子。眷獣は電撃を発し殲教師の装備を破壊する。とどめを刺そうとするがアスタルテに阻まれ攻撃を止められる。

「くそ！これでもあいつには届かないのかよ！」

古城がそう言うのと姫柊が現れ古城に言う。

「いいえ先輩。私達の勝ちですよ。獅子の神子たる高神の劍巫が願ひ奉る。破魔の曙光、雪霞の神狼、鋼の神威をもちて我に悪神百鬼を討たせ給え！」

そう唱え、雪霞狼を投げ飛ばしアスタルテを一閃する。そこに古城が眷獸を使い電撃を与える。オイスタツハに姫柊が一撃を与え古城が殴り飛ばしとどめをさす。

「終わりだぜ！おっさん」

「まだまだあ！」

オイスタツハは最後の力を振り絞って古城にカウンターを仕掛ける。

流石の古城と言えど反応が出来ない、それに加えて、雪菜ちゃんは、遠いところに居るので、攻撃を受け止めることも出来ない。

「これで終わりです！」

オイスタツハが攻撃を仕掛けようとしたその時……

「縛道の六十一、六杖光牢（りくじょうこうろう）」

「な……に！」

「済まないねえオイスタツハ俺も我慢の限界なんだわ」

そこには、氷輪丸を背中に掛けている冴夜の姿があった

――
俺は六杖光牢を使いオイスタツハの動きを止める。

「冴夜！」

「待たせたな古城」

「何ですかこれは！」

「ああ、コイツは鬼道と言ってな、その中の四つの種のうちの一つ縛道を使わせてもらった、能力は見ての通り相手の動きを封じるだ」

俺はオイスタツハの目の前に立ち冷たい目線をオイスタツハに向ける

「分かっているだろうなお前？死ぬ覚悟があるからこの場に立っているんだよな？」

「何を言って……」

そう言うオイスタツハに手のひらを向け詠唱を始める

ささて…… サツサと終わらせるか。

「君臨者よ 血肉の仮面・万象・羽搏き・ヒトの名を冠す者よ 焦熱と争乱 海隔て逆巻き南へと歩を進めよ……」

俺の手の平には大きな霊圧の塊が出来ているこれが至近距離で当たれば無事では済まない

「や、辞め……」

「今更遅い、お前は多くの人の命を奪った」

「オイスタツハ、お前の考えは間違いでは無いのかも知れない……だが、それでこの島の人々の命を奪って良い理由にはならねえんだよ……」

俺は最後に名前を吐く

「破道の三十一、しゃつかほう赤火砲」

ドオオオオオオオオオオオオン！

「ふう、これにて一件落着」

俺は、オイスタツハの真横に赤火砲を打ち爆破させた。

流石のオイスタツハでも気絶したようだ。

へッ、ザマア見やがれこのすつとこどっこい

「ありがとな、洗夜」

「まあ、お互い様だな」

俺は古城に安全の確認を取る

「それにしてもお前、眷獣を従えたのか」

「あ、ああ」

「それは良かった……で、眷獣を従えたと言うことは、お前吸血したな？」

俺は冷ややかな目で古城を見る。予想はしていたが、本当にやるとは……

「まさかお前が中学生に手を出すとは……」

「ちがつ、あれは不可抗力だ！しかもあれは眷獣を従えるために仕方なく……」

「先輩、私の血を吸ったのは仕方なくだったんですか……」

「姫柊？待て……なんで槍を俺に向ける」

「先輩の……馬鹿アアアア!!」

「ぎゃああああ!!」

古城、ドンマイ（＾▽＾）

そう思う事しか出来ない俺であった。

—————

絃神島海域

其処に大きな船、”オシアナスグレイブ”が止まっていた。
その船のガレージには白いタキシードで身を包む男が一人。

「さあ、会いに来たよ……」

「我が愛しの第四真祖、暁古城」

次回ストライク・ザ・ブラッド〜氷結の侍〜

第二章 戦王の使者I

第2章 戦王の使者編

戦王の使者Ⅰ

港湾付近倉庫区画

「はあ…… はあ…… はあ」

そこを走る人影が一つ、いや獣人だけどね？

何やら何者かから逃げているようだ。

「くそ！くそ！くそ！」

獣人は黒死皇派、クリストフ・ガルドシユの部下のようだが、何故か取引の情報が漏れていて、アイランドガードが、そこに攻め込んできたと言う。

「くそ！一体何処から情報が漏れて居たんだ……！」

獣人の男は起爆スイッチをポケットから取り出した。

「やってくれたな、人間ども…… 同士の仇だ、思い知れ！」

カチツ

ボタンを押すが反応がない

カチツカチツカチツ

「くそ！なんぜだ！」

その時

ガキン！

「！」

鎖が獣人の男が持つ起爆スイッチを奪い取る

「今時、暗号化処理もされて居ないアナログ式起爆装置か……」

そこには黒いドレスを着ている少女が佇んでいるが、獣人はすぐさま普通の人間ではない事を悟る

「攻魔師か…… どうやって追いついた？」

「お前こそ、逃げれると思って居たのか？ 思い上がりも甚だしいな…… 野良猫風情が」

「ぐっ、グアアアアアアア！」

獣人は攻魔師の少女に襲い掛かるが、避けられる。

だが、それでは諦めず再度攻撃を仕掛ける

だが、それを軽々と避けながら攻魔師の少女は考察する。

「察するにクリストフ、ガルドシユの部下と言ったところか……黒死皇派の死に損ないが海を渡って来てご苦労な事だ……」

そして獣人がまた攻撃を仕掛ける

「グアアアアアア！殺すウウウウウウ！」

だが、次の瞬間

シユン

「何！」

その場から先ほどもまで居た攻魔師の少女がいなくなっ居たのだ。

「無理だよ、貴様には……」

「！空間制御の魔法！」

その声があった方向には先ほどもまで居た攻魔師の少女が居た。

「馬鹿な……そんな魔法、高位系統の魔法使いで無ければ……まさか！」

男はようやく気付いたように言う

「お前まさか……」空隙の魔女”南宮那月！”

次の瞬間那月の目の前に魔法陣が出現し、魔法陣から大量の鎖が獣人に襲い掛かる。

「何！」

数分後、鉄骨の下に獣人の男は吊るされて居た。

「戦王領域の奴らに興味はあるが、尋問はアイランドガードの奴らに任せよう……明日の授業の支度もあるしな……」

そう言った瞬間

ポオオオオオオオオオオオオ!

辺りには船の大きな汽笛が鳴り響いた。

暁家早朝

古城にしては珍しく早起きしていた。

「ファ……アレ？」

珍しく暁家の食卓には三つの食器が並んでいた。

「今日は母さん帰って来たのか」

「いつつも研究所にこもりっぱなしだから来週まで帰ってこないのに……」

それでも古城の母は見つからず妹の暁風沙（あかつきなぎさ）に聞いてみる事にした。

「おくい風沙、母さん帰って来てんのか？」

「そう言いながら古城は風沙の部屋の中に入るが……」

「だったらコーヒー三人分……」

「?!」

そう、そこには着替え中の姫柊が居たのだ。

「入れといた方が……」

「……」

「ど、どうして姫柊が……」

古城が視線を落とす。

だが気まずくなりもう一度顔を上げると、姫柊と目が合う。

「あ、あははは……」

すると姫柊が鋭い目つきで古城を睨む。

その目には涙が浮かんでいた、相当恥ずかしかった事が伺える。

「っ！はあー！」

「ゴハア……」

朝から姫柊の踵蹴りを食らう古城であった……

—————

朝マンションから出てくる古城と雪菜ちゃんが居たので話しかけると、何故か古城の花にはティッシュが詰め込んであった。

「ど、どうした？古城」

「洗夜……それは聞くな」

なんか聞いてはいけないオーラが出て居たので聞くのはそこで辞めた。

「お、おはよう雪菜ちゃん」

「おはようございます洗夜先輩」

うん、古城絶対朝やらかしたな！

と確信した瞬間であった。

「と、凧沙ちゃん久しぶり」

「うん！久しぶり洗夜君！」

うん、やっぱり凧沙ちゃんコミュカの化け物だわ（＾＾）

「つと、こんな事してる場合じゃない」

「そうだな、モノレールに乗れなくなっちゃう」

俺達は早足で、駅に向かった。

—————

モノレール中

「……」

「だ、大丈夫ですか先輩」

何やら古城を心配する雪菜ちゃん

「なあ、古城」

「……なんだ」

「お前本当何やった？」

まさか雪菜ちゃんに手を出したんじやと言いかけたが古城に制止された。

そして朝起こったことを雪菜ちゃんに聞いた

「なるほど…… そりや古城が悪い」

「なんでだよ！」

は？コイツついに頭がいかれたのか？

「そりやお前、部屋に入る時にノックするのは世間一般的に当たり前の事だろ、特に女子の部屋なんて以ての外だ」

「グツ、それを言われると言い返せない」

だが、そこに雪菜ちゃんが割って入る

「いえ、洗夜先輩アレは私の責任です」

「ひ、姪姪……」

「先輩がそのような人だとは分かっていました、しかも事故を装ってそのような行動を取るのは想定内だった筈です……それを失念していたなんて」

そう雪菜ちゃんが言うのとまたまた今度は凧沙ちゃんが割って入る「ダメだよ雪菜ちゃん、こんな変態を許したらますます調子n」だから、アレは事故なんだって」

すかさず凧沙ちゃんと言葉にツッコミを入れる古城

「ノックもしないで入って来て何が事故よ、大体今日の朝雪菜ちゃんが来るって言うておいたでしょ」

すぐさま反論する凧沙ちゃん、俺は凧沙ちゃんに口で勝てる気がしない。

「まあ、古城がそんな事するわけ無いだろ」

「おお分かってくれるのか洗夜！」

「いや、待てよ…雪菜ちゃんの場合あり得なく無いな…」

「どうしてそうなるんだよおおおおお！」

いやあ、古城を弄るのは楽しいなあ

「でも、なんでうちに？」

「朝話したでしょ…」

古城人の話はちゃんと聞こうな（ ^ ｖ ^ ）

「全く話聞いて無かったね」

「話してたか？」

「言ったでしょ！球技大会で使う衣装の採寸と仮縫いやつてたの」

ほお〜そういうええばそろそろ球技大会だったな

そういうええば種目何になったんだろ。

「でもなんで球技大会でそんな物を？」

「はあ…そこも聞いてなかったんだ」

物凄く長い話になりそうだなと思いい俺は耳にイヤホンを付け音楽を聴き始めた。

「チアリーダー？」

電車を降りて学校まで来た俺達は高等部の教室へ向かいながら先程の話を古城から聴いていた。

「そうだ、姫柊のクラスの男子が土下座して頼んだんだと、姫柊が応援してくれるなら、死にものぐるいで優勝して見せるって話だったよ」

「だ、男子全員が?!」

嫌々、流石にそこまでするか？

…… いや、雪菜ちゃんの場合そうなるか

「んで、姫柊が「そこまで紳士に頼まれるとどうしても断れない」とか言って引き受けたらしい」

「ほお、雪菜ちゃん以外と人気有るもんなあ、でも風沙ちゃんも十分可愛いと思うけどなあ」

そう呟くと古城は光の速さ（流石に超えない）で俺を否定する。

「いや、それはダメだ俺が許さん」

「…… シスコンめ」

「そういや、コイツシスコンだったの忘れてた」

「つつても、姫柊だけじゃ可愛そうだとかで本人もやるらしい」

「良かったじゃん」

「でもお前の事だから応援して欲しかったんじゃないのか？」

「いや、それさつき風沙からも言われた」

あつ、さいですか

まあ、古城とそんな話をしていると教室に着いた。

次回 戦王の使者Ⅱ

戦王の使者Ⅱ

「ういゝつす」

「おはよう」

俺と古城は早速教室に入る。

それと少し遅れて浅葱が入ってくる。

「おはよう浅葱」

「よつ、浅葱」

「古城と洸夜おはよう」

「はいコレ」

すると浅葱は黒い鞆をこちらに差し出して来た。

「なんだコレ、ラケット?」

「浅葱さんや、これは何に使うんだ?」

「球技大会の練習に使うの、学校の備品だけじゃ足りないから、姉ちゃんから借りて来たの」

流石浅葱、準備が良すぎて逆に怖い気さえする。

すると黒板付近にいた基樹がニヤニヤしながら古城と浅葱を見る。

「どうした? 基樹、そんなニヤニヤしながら古城と浅葱なんか見て」

「このタイミングではほぼ同じ到着とは中々運命ってやつだなコレは」

何言ってるんだコイツ、古城と一緒に頭がいかれたか、若しくは…

「そういえば古城、お前種目何にした?」

「え? ああ、それならなるべく楽な種目にしておけて基樹に頼んどいたぞ」

「お前、本当やる気ないのな」

って事は、古城が基樹に種目選びをさせた、基樹がニヤニヤしている。絶対何か企んでいる。

「んで基樹、古城と浅葱が運命ってどう言う事だ?」

「これを見ろよ、これ」

基樹は黒板の方を指して俺に言う。

「これって、黒板しかn…」

俺が黒板を見ると、テニスダッグのペアが古城と浅葱だったのだ。

「なんで私が古城とペアなのよ！」

「今回の競技大会はバドミントンはシングルなくしてミックスダブルス増やすって言ってたじゃない」

「そういうことじゃなくてなんで私と古城がペアなのか聞いているの！」

「だって好きって言ってたじゃない」

「は、はあああああ／／！！」

「バドミントン」

「へ？」

「古城君も別にいいわよね？」

「まあ楽そうっちゃ楽そうな競技だしな」

おい古城、少し状況判断をしろ。

あくあ、俺は知らんからな。

すると、基樹が後ろで浅葱に何か吹き込んでいる。

基樹、お前死ぬかもな。

放課後

「はあ……なんで俺まで練習になんぞ付き合わにやならんのだににしても……だ

「なんでこんなカップだらけなんだ？テニスのダッグってのは」

「俺が知るかよ」

まっ、古城に聞いても拉致があかん……

「にしても浅葱遅いなあ、俺このまま溶けてなくなれる自信あるぞ」

「そりゃ俺もだ」

流石にそろそろ熱くなってきたな

「しゃあない、古城飲み物買ってくるわ」

「あ、俺のも頼む」

「んじや、金払え」

すると古城は「んじや良いやと言った」

まさかコイツ元々俺に払わせる気だったな……

そんな事を考えながら自販機で飲み物を買って古城の元に戻る。

「しようがねえからお前の分も買ってやって… ってなにやってんだ？古城」

そこには金と銀の折り紙でできたライオンの様な物体が古城に威嚇をしていた。

「またお前面倒な事起こしてないだろうな？」

「流石にするわけねえだろ！」

はあ、しようがねえなあ…

「おい、獣ども」

俺が声を発するとこちらに気づいた様子でこちらにも威嚇してくる。

だが俺は、低い声でしかも威嚇するように声を放つ。

「今すぐ木っ端微塵にしてやろうか？」ニヤ

刹那ライオン？のような物の動きが止まった

「ホレ、後は頼んだぞ雪菜ちゃん」

すると後ろから雪菜ちゃんが出てきて、雪霞狼を使いそいつらに攻撃をする。

「はあー！」

すると、ライオン？のようなものは煙の様に消えていった。

「ふう、危なかった…」

「大丈夫か？古城」

「そうです、怪我はありませんでしたか？」

にしてもアイツら何だったんだ？

行成古城を襲ったりなんかして。

「古城、なんでこうなったか教えてくれないか？」

「ああ、確か洗夜を待っている間に弓矢みたいなのが飛んできたと思ったら、さっきの奴に… って感じかな」

なるへそなるへそ、こうなると何だか嫌な予感がし過ぎてもうお家に帰りたい。

「多分、先輩を襲ったのは、式神だと思います」

「式神？」

「式神って確か、陰陽師とか霊媒とかが従える奴らのことか？」

まさか、そんな高度な事ができる奴が居るってのか？

そもそも古城に式神で襲わせた理由は？

「お、おい洗夜」

「おん？なんだ古城」

「コレなんだが……」

すると古城は手紙を出してきた。

「なんだ？ラブレターなら要らんで、俺はホモでは無いからな」

「ちげえよ！さっきの奴らがいた場所に落ちてたんだよ！」

ほう、成る程…… ってこのマークどつかで見覚えがある様な、無いような……

「先輩！そのマークまさかアルデアル公国のマークでは無いでしょうか？」

「は？」

「なんだ？アルデアル公国って」

おいおい、なんでアルデアル公国のマークなんかが付いてるんだ？

アイツが来ているわけでも無いし……

てか古城、お前本当に何も知らないのな。

「アルデアル公国ってのはな、古城……」

アルデアル公国

欧州「戦王領域」内にある国家のひとつ。君主はデイミトリエ・ヴァトラー。領土の西側はバルト海に面しており、アルデイギア王国と国境を一部接している。芸術が盛んなことで知られており、人類圏からの旅行者や移民も広く受け容れている。

「とまあ、こんな感じだ」

「アルデイギア王国ってあの？」

「そ、そのアルデイギア…… ってなんでアルデアル公国しらねえのにアルデイギアは知ってたんだよお前……」

本当コイツまじでわけワカメ

って、こんなことしてる場合じゃなかった。

「古城、手紙の内容は？」

「え？あ、ああ…って、なんじやこりや！」
うるせえ、一々大声出さんとあかんのか？

お前いつつも一回は大声出すやん。

「こんなもん入ってた」

と、手紙を差し出す古城。

へっ、どうせ大したもんじやn

「は？」

「だろ？」

「どうしたんですか？お二人ともってえ？」

そりや雪菜ちゃんもそうなるわ…

って嫌々どうしてそうなった？！

え?!なんで?!はあ?!(語彙力低下)

おっと済まない取り乱してしまった。

そこに書いてあつてのは…

「なんでお前なんかにパーチーのお誘いが来るんだよ…」

「知るか！しかもなんだパーチーってパーティーだろ普通」

んなことあどうだつて良いんだよ。

え？!良くない？知らんがな

てか、何か忘れてる様な…

あつ

ちようどそこに着替え終わった浅葱が登場。

こりや修羅場だな… おつかれ古城(^v^)

と、思いきや浅葱はアルデュアル公の手紙をラブレターだと勘違いしたのか何なのか分から何が、走り去ってしまった。

俺は何も知らんぞ古城

「なあ、古城」

「なんだ？」

「生きるよ…」

「なんだその不吉な言い方は！」

だつていつか浅葱に殺られそうじゃん

「んで、他にはなんて書いてあるんだ？」

「ん？えつと… パートナーを一人連れてこいつて書いてあるぞ？」
「ほう」

古城、そこは選ぶ人決まってるよな？

「那月ちゃんでも誘って行くか」

「は？（え？）」

だよね？雪菜ちゃんも驚くよね？

いや、鈍感とかその域超えてるぞ？

「あの、先輩…」

「？なんだ姪終」

「もつと適任な人が居るはずですけど…」

そうだよ（便乗）

古城早く気付けや

「誰だ？」

「せい！」

「ゴフウ！」

俺は痺れを切らし、古城に腹パンしてやった

勿論溝にな（ωω）

「い… きなり… なに… すん… だ…」

「いや、済まんな古城、お前が物凄く察しが悪すぎてな、ちよつと頭に
来た」

「は？察しが悪いってどう言う事だよ」

なあ、もう一回殴って良いよな？良いよね？

「お前なあ、雪菜ちゃんが居るだろ」

「姪終？」

「お前の監視役連れてかなくて何になる、雪菜ちゃんがあるだこーだ
言われるだけだぞ？」

「そうです先輩！私は先輩の監視役何ですから、私を連れて行くべき
です！」

「そう言えばそうだな…」

コイツ察し悪すぎて嫌になってくる…

だから鈍感って奴は…

こうして古城と雪菜ちゃんはパーティーの準備、俺はふつうに帰宅した。

え？テニスはどうしたって？知らんな

次回 戦王の使者Ⅲ

戦王の使者Ⅲ

とある研究所ある一人の男がモニタに向かって何かをしていた。

「……」

その時

ガシュー

研究室の扉が開く音が聞こえ振り返る。

そこには二人の黒いスーツを着た男がいた。

すると片方の男がこう言ってきた。

「嘉納アルケミカルインダストリー社開発部榎村陽介だな……」

その男、榎村は何が起こっているか分からずスーツの男に問いかける。

「なんだ君達は、ここはクラス6の機密区域だぞ？」

すると片方の男が

「榎村研究主任、この研究所で扱っている荷物には、魔導貿易管理令に違反する物品が入っているという疑いがある」

「なっ……ま、待ってくれ、なにかの間違いでしょうここにはそんな」

訴えかける男に少女の言葉が聞こえて来た。

「クリストフ・ガルドシュ」

「！」

そこには黒いドレスを着た少女、南宮那月が居た。

「我々は先日その部下一面を拘束している」

那月は淡々と話をする中、片方の男が手錠を持ち榎村に近づく

その瞬間

ドコオ!

榎村は近づいて着た男を吹き飛ばす

「！」

もう片方の男は驚いて急いで拳銃を出そうとする。

すると榎村は瞬く間に人ではない姿、獣人となった。

「グアアアアアア！」

「やはり、未登録魔族……黒死皇派の審判か……」

那月が冷静に考察していると獣人が襲いかかって来た。

「ガアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

「下がっている」

那月は男を後ろに下がるよう促す。

「グウウウウウウウウー！」

男が獣人特有の爪で那月を切り裂こうとするが、那月はいとも容易く攻撃を避け、獣人を蹴り倒す。

「グウ」

すると獣人の前にもう一人少女アスタルテが居た。

「アスタルテ、少しくらい手荒に扱っても構わん、そいつを拘束しろ」

「命令受諾（アクセプト）」

「ホムンクルス……こんな餓鬼が俺を止められると思っっているのか！」

獣人はアスタルテを威嚇するように目の前に立つ。

だがアスタルテは何ら問題もないような顔をして

「執行せよ（エクスキュート）、薔薇の指先（ロドダクテユロス）」

アスタルテがそう唱えるとアスタルテの後ろから翼の様な物が現れた。

「グッ」

次の瞬間、翼の様な物は一瞬にして大きな白い手へと変わり獣人に襲い掛かる。

ドコオ!!!

獣人はアスタルテの脊獣によって壁に叩きつけられる。

すると力尽きたのか、壁には獣人ではなく槇村の姿に戻っていた。

「脊獣……だと☒どうしてホムンクルスなんか脊獣を……」

槇村はそう言いながら倒れていった。

先程のスーツを着た男が槇村に手錠をかける

「南宮教官、お陰で助かりました」

と、男は那月にお礼を言う。

「礼などいらん、働いたのは私ではない、うちの新人だ……？」

那月はふと槇村のキーボードの上に資料が置いてあるのを発見し

た。

「密輸品はコレか…… オリジナルは？」

と、アスタルテに確認をとるが

「認識…… 確認不能、既に当施設から運び出されたものと推定します」
それを聞くなり那月は眉をひそめて呟く。

「出遅れたという訳か……？」

那月は槇村のパソコンの画面を見つめる…… すると何かを見つけた様で、そこには

「ナラクブエーラだと！…… 何を考えている」

オシアナスグレイブ内部

そこにはある白いタキシードで身を包んだ男と、その後ろに高校生くらいの女性が大きな袋を背負って立っていた。

「しかし、君みたい綺麗な子がお目付役とはねえ…… それで、紹介して貰えるのかな？」

と男が聞くと女性の方は

「はい、匿う積りはありません。第四真祖は……」

すると女性の目つきが変わる

「私達の敵ですから」

ここにもまた、古城を狙うものが居るなど古城も、洗夜もまだ知らない……

オシアナスグレイブ前

「なあ、古城や」

「なんだ？ 洗夜」

「なんで俺がこんなところに来なこや行かんのd」「知らない」

…… 即答辞めてくれる？ コツチが悲しくなってきた。

え？ 状況を説明しろ？ アツハイ

数時間前

「やつと家に着いたあゝ」

なんで帰りに運悪く帰宅ラツシユの時間帯に遭遇すのか
ねえ…… お陰でコツチはもう動けんぞ？

まあ、もともと寝る気満々だが……

「？なんだこれ、どつかで見覚えが……」

俺がドアを開けて家の中に入り、念のためポストの中身を確認する
と、手紙が入っていた。

うん、そこまでは良いんだよ？ 実はそこらなんだよねゝ

「まあ、いつか内容だけ読んどこ」

俺はリビングに行き、ハサミで手紙が入っている封筒を開けた。

「中身は何じやろなつと…… え？」

俺に届いた手紙の内容はこうだった。

背景 絃神洗夜様

この度は大変申し訳ございませんが、貴方をパーティに招待させて
いただきます。

勿論拒否権は有りません、拒否してもよろしいですが、貴方の身は
安全とは程遠い物になるでしょう。

そもそも何故招待状を出しましたかと言いますと、バトラー様が暁
古城様の一番のご学友との事を調べ、おまけに並みの人間では無いと
知った上でこれを出させていたきたいと思います。

服の方はこちらで用意してご自宅にお送りさせてもらいました。

迎えも9：30に向かわせますのでよろしくお願いいたします。

バトラー秘書

こう書かれていた。

「はあ…… 拒否権ない＋拒否した場合安全とは程遠い物になるで
しょうってなんやねん、ほぼ脅しやんけ」

俺がそう愚痴って居ると

ピンポン

と軽快なインターホンの音が鳴り響いた。

な名前なこつたねえ」

ほんと反吐がでる。

「あ、あの……」

すると雪菜ちゃんがモジモジと何かを言いたげにしている。

「?どうした、姫柊」

「どうしたんだい?雪菜ちゃん何か言いたい様だけど……」

俺と古城が質問すると、頬を赤らめながら言ってくる

「あ、あのやつぱりこの服おかしくないですか?」

え?なに言ってるんの雪菜ちゃんむしろええで、マジグッドやですると古城が

「いや、全然……」

古城や、そんな目で雪菜ちゃんを見ても説得力の欠片も無いんだが……

案の定雪菜ちゃんに雪霞狼を向けられていた

「な、なんでコツチに向けてくるんだよ!」

「先輩が下心に塗れた顔で言うから」

「塗れてねえよ!」

うん、相変わらずリア充やなコイツら、吹き飛ばしたくなっちゃう

ZA☆

「……あと姫柊、髪飾り曲がってるぞ」

「あつ、ありがとうございます」

「珍しいね、雪菜ちゃんが髪飾りなんて」

俺ほぼ見た事ねえや、あとで写真撮らせてもらおう。

「昔、高神の杜に居た時ルームメイトに貰ったんです」

「ほえ、そりや良かったな」

「え、剣巫の?」

古城以外といい質問すんのな。

「いえ、剣巫ではありません」

「ほくんじゃ何か聞いても?」

「はい、剣巫ではありませんが、同じ獅子王機関の攻魔師で、今頃どうして居るか……」

ほく、昔ボツチだった俺からは想像出来ないや…… って上から妙に殺気が凄く来るんだが……

俺は気のせいだと言い聞かせた。

うん、そうしないと殺されそうだからね！

そんな雑談をしていると、専属のスタッフ的な人が俺達を船の中まで案内していった。

次回 戦王の使者Ⅳ

戦王の使者Ⅳ

♪

オシアナスグレイブの中には、大分多くの人が集まって居た。

まあ、ほとんどがお偉いさんかセレブや富豪だろうな……ってな
んでプールなんか付いてんだよ。

「場違いも良いところだぞ俺達……」

「それな」

全く、古城にはちゃんとした理由があつて読んで貰つて居て欲しい
物だな……俺が来た意味がなくなる。

「古城、俺はちとこの船の中を探索してくるよ」

「お？そうか、分かった。何か会ったら連絡するよ」

さてと、オシアナスグレイブの中には何があるのかなあ……

—————

オシアナスグレイブ内部

「よつと、ここは……ってなんじゃこりや！」

そこは格納庫もようだったが、中には大量の機会が置いてあつた。
「何だ？この後工事でもすんのか？……ってよく考えて見たらこれ
ナラクブエーラじゃん！え？ドユコト？なんでバトラーなんかの船
にこんな兵器乗ってるんだ？ってそんな事より早めにぶっ壊さねえ
と」

俺はあらかじめ持つてきて居た氷輪丸を取り出し刀を抜こうとし
た時。

「誰か居るのか？」

「！」

入り口から何者かが、入つて来たのである。

あの姿からするに黒死皇派の奴らか……確か前にアルディギア国
王からそんな話があつた様な……まさか、バトラーがわざとナラク
ブエーラを格納庫に入れたりなんかしてねえよな？

そう考えて居たその時。

ブーツブーツ

携帯のバイブレーションが鳴る。

「古城か…… もしもし、どうして「洗夜すまねえが、今すぐ上のロツジに来てくれないか？」…… なんか会ったんだな？直ぐに行く」

俺は一応ナラクブエーラの一機に爆弾を仕込ませておいた。

これが作動しない事を祈るよ……

俺は黒死皇派の奴らに見つからない様に格納庫から出て行った。

—————

オシアナスグレイブ ロツジ

「どうした古城、つてあんたは……！」

「やあ、初めまして絃神洗夜」

そこには俺達を呼んだ張本人デイミトリエ。バトラーが居た

「これはご丁寧にもどうもアルデアル公」

「嫌だなあ、私はバトラーと読んで貰っても良いのだけどね」

流石に真祖にタメ語は気がひけるが、コイツなら別にいいか。

「分かった…… そんで古城、俺をなんで呼んだんだ？」

「そいつがいきなり眷獣を姫柁にぶつけようとしてきたんだ」

成る程…… 考えるに古城の力量を測ったつてどこか。

しかしそれだけで俺を呼ぶ必要はそこまで無いはず……

「バトラー、一体俺になんの用で古城に俺を呼ばせた？」

「成る程、察しが良くて助かる」

するとバトラーは古城の方を向く

「申し遅れてすまない、私わデイミトリエ。バトラー…… 我真祖ロス

ト。ウォーロードより、アルデアル公位を賜りし者……」

「さつきも聞いて居たが、あんたがバトラー……」

するとお辞儀して居たバトラーが顔を上げ

「初めまして、と言つて置こうか暁古城…… いや、焰光の夜伯（カレ

イドブラッド）我が愛しの第四真祖よ……」

と、バトラーは古城に投げキッスをする

「「はあ（え）?!」

やべ、吐き気が止まらん。

俺にしてないと分かっている、男が男にそういう行為をする時点

で吐き気が…

ふう、やっと治った。

まあ、数秒しか経つとらんけど…;

「なんだ、その芝居がかった喋り方は」

「うん、流石の俺も引くわ… 古城がそんな性癖だとは…」

「いや、そっちかよ!」

え? それ以外に何あんの? あ、コイツ馬鹿だから分からのか…:

そんな事を考えていた次の瞬間

ヒュン…: ガツ!

何かが物凄いスピードでこちらに飛んできて俺と古城の間をすり抜けて床に突き刺さった。

「こ、これって…:」

「まさか…:」

俺と古城は一瞬だけ顔を見合わせると同時に上から何本ものフォークが降って来た。

「あつぶね」

「大丈夫か古城!」

しかも古城を重点的に倣ってやがるが、地味にこっちにも飛ばして来やがる…:

すると上からチャイナ服を着た女が下に降りて来て直ぐに俺達の前に来た。

「雪菜から手を離しなさい、暁古城」

「え?」

「なんだ古城、コイツの知り合い?」

「いや、知らん」

え? んじゃ誰? なんで馬鹿(古城)のこと知ってるの?

「紗矢華さん!」

「「え?」」

何?! コイツ雪菜ちゃんの知り合いだと…: !

「紗矢華? って誰だhゴフウ」

すると紗矢華と呼ばれる女は古城をつき飛ばし雪菜ちゃんに抱きついた。

この！羨まsゲフンゲフン破廉恥な！

「雪菜雪菜雪菜雪菜雪菜雪菜雪菜」

え？何この人怖い、抱き着いた途端雪菜ちゃんの名前連呼し始めたんやけど…

こりや流石の古城と俺でも顔をひきつらせる。

こんなやばい人初めて見た。

「久しぶりね、元気だった？」

「え、ええ」

この人テンション高すぎやろ、珍しく雪菜ちゃん困つとるやん。

「う、ううん」

「だ、大丈夫か？古城凄い音立てて床に倒れたが…」

そんな話をしている中、あちらはあちらで話をしていた。

「でもどうして… 外事課で多国籍魔導犯罪を担当してたんじゃ…」

「今でもそうよ、ここではアルデュアル公の監視として付いて来たの」
なるへそなるへそ。

それならばここに居てもおかしくないけど、流石に人を突き飛ばすのはちよつと…

「それじゃあ、あの手紙」

「そう、彼（バトラ）に依頼されたの」

ほうほう、でも流石に殺気丸出しで送られて来て嬉しい人はいないんじゃ…

「それにしても体は平気？痛くない？」

「…… なんだコイツ」

過保護過ぎるやろ雪菜ちゃんに対して。

「獅子王機関もなんて酷い、私が居ない間に第四真祖の監視任務を雪菜に押し付けるなんて」

流石にそこまでは行っていない気がするんだけど…

流石に古城も何か感じたのか、雪菜ちゃんに質問しようとする

「お、おい姫r「呼ばないで」は？」

「貴方に雪菜の名前を呼んで欲しくない、雪菜もそうでしょ？」
嫌々なんでそんな理屈に行き着く！

てか、嫌そうじゃなくてむしろ俺からしたら雪菜ちゃん嬉しそうな
んですけど！

「え？ああ、私は…。」

ほら、雪菜ちゃん戸惑つとるやん。

「古城…。」

「なんだ？洗夜…。」

「俺が言いたい事分かるよな？」

「ああ」

流石古城、察しが良い。

「なあ姫柊、コイツは一体誰なんだ？」

すると雪菜ちゃんは素直に答えてくれた。

「煌坂紗矢華（きらさかさやか）獅子王機関の舞威媛です」

「あつ、さつき話していたルームメイトの人か…。」

「舞威媛？剣巫と違うのか？」

「教えてあげる、舞威媛って物は…。「舞威媛（まいひめ）獅子王機関
に仕える攻魔師で、主に呪詛と暗殺を専門として活動、それが転じて
要人警護や密偵の任務に就くようになった…こんな感じだろ？」
！」

「洗夜、なんでお前がそれを？」

「言った筈だぜ？仕事上こう言うもんは否が応でも知る事になるんだ
よ」

「違うわね」

「なに？」

え？違うの？めっちゃ恥ずかいカツコつけてドヤ顔で言っちゃまっ
たやないかい。

「主に雪菜に近付く者を抹殺するのよ…。」

「いや、それ私情！」

全然まちがえとらんかったやないかい！

それはただの私情ですよ？OK？

「分かったらこれ以上雪菜に近付かないて」

「うわあ、露骨な脅し…」

「何か言った？」

「イエナンデモ」

いや怖！怖すぎるんやけど…

「どうする、古城」

すると古城は一度バトラーの方を向く。

バトラーは明らかに狙っていたかのごとくニヤニヤしていた。

「… はあ、勘弁してくれ」

うん、お疲れ古城！（他人事）

さあて、今夜は楽しくなりそうだなあ。

ああ、後バトラーにナラクの事は聞かんとな

俺達はバトラーの案内で中に入る事にした。

次回戦王の使者V？

戦王の使者Ⅴ

浅葱の部屋にて

「んで、それでお前は逃げて来た訳?」

「別に逃げて来たわけじゃ無いわよ」

浅葱は、今日の古城と姫柊の事で基樹に連絡をしていた。

「私あの馬鹿古城が何かコソコソして無いか気になるだけなの」

「姫柊って子と付き合うなら堂々としてれば良いのに…水臭いでしょうが」

どうやら浅葱は、放課後のアレ（戦王の使者Ⅱを見てね☆）の事を勘違いしている様だ。

「そりゃ、本当に付き合っていないからじゃ無いの?」

「え?」

「なのに、アイツ古城は姫柊ちゃんとコソコソしてる…そうなると思えらるる考えは一つだわなあ」

と、行成の基樹の発言に浅葱は驚きを隠せなかった。

まあ、あそこまで見れば付き合っていると誰もが思うが、基樹の考察はまるつきし当たっていた。

「なに?」

「古城は、あの転校生に何か弱味を握られてるんだわ、きっと」

「は、はい?弱味?」

「取り敢えず古城を誘惑してみるってのはどうだ?」

「ゆ、誘惑って…何で私が」

「おいおい、色仕掛けは情報収集の基本だろ?ハニートラップって奴」

明らかに電話越しでもにやけて居るのが容易に想像出来るように基樹が言う。

「基樹、あんたね…」

「おっと、彼女に電話する時間だ、この話はまた今度」

「ちよ、まだ話は…ブツツ」

一方的に基樹から電話を切られた今の浅葱はさぞ御立腹だろう。すると突然

ピロリン

「スパムのくせに私のフィルタ超えてくるなんて、やるじゃない」
浅葱の部屋に大々的に置いてあるモニターが約九つあるパソコンにメールが送られて来た。

その内容は……

「解読希望？何、私に挑戦しようっての？」

すると浅葱はパソコンに向かって解読を始めるのであった。

—————

オシアナスグレイブ内部

俺達バトラーに連れられて船内に入ったのだが……おいワインを飲むな。

こちらとら気まずくて動けないんやぞ？

「……さっきの気配、獅子の黄金だね？」
レグルスアウルム

でもコイツなにかと気配感じんの上手くてなんかムカつく。

「知っているのか？」

「ああ、カレイドブラッド焰光の夜伯、アブロウラ、フロレスティーナ、五番目の眷獣、レグルスアウルム獅子の黄金……」

「お前、アブロウラの知り合いか？」

ほう……これは興味深い何かが、ありそうだなあ。

するとスタッフが飲み物を持って来てくれた。

そういえばこれ、アルコール入って無いよな？

するとバトラーが以外……と言うか、やばい事を言い出した。

「そうだな……一言で言うなら、愛し合っていた」

「ブホオ」

「愛し合っていた……？」

「な、何行成変な事を言うんだバトラー、お陰で吹いちゃったじゃねえか」

せつかくの飲み物が台無しじゃねえか。

「ああ、済まない。でも変な事では無いさ、本当に僕達は愛し合ってたんだよ?」

「嘘だな、実際アブロウラ・フロレスティーナは、余り寄り付かないと聞く... それにお前は戦闘狂、アブロウラに接点があるとはいえ思えない」

「これは手厳しい... だが、真実は真実、だから愛を語り合おうじゃないか、 暁古城」

すると古城はすぐさまソファアの後ろに退避した。

まあ、そうなるわなホモじゃない限り。

「待て待て！俺はアブロウラじゃ無い！」

「しかし彼女を喰った... そうだろ?」

「ぐっ！」

流星に強く出られない古城。

あいつ、口喧嘩で俺に勝った事無いしなw

するとバトラーもソファアの後ろに飛んで行く。

まあ、ア●ムみたいに飛ぶわけじゃなく、手を掛けてそこを重心にし飛ぶ、皆んなもやった事あるだろ?」

「だから、僕は彼女の血を受け継いだ君に、愛を捧げる」

と、言いながら床に着地した。

うわあ、めっちゃいい事言ってるようでもっちゃキモい事言ってるな〜コイツ。

しかも古城もめっちゃ顔引きつってるし。

「その理屈が可笑しいってんだよ！第一俺は男だ！」

「そうだぞ、バトラーコイツはホモじゃない、女垂らしだ」

「ホモよりは良いけど、酷くねえか?それ」

古城それを気にしたら終わりだ。

すると雪菜ちゃんがバトラーに話しかけて来た。

「アルデアル公」

「君は...」

「獅子王機関の剣巫、姫柊雪菜と申します」

やっぱ律儀やなあと、思ってしまう俺である

「ふうん……ところで、古城の体から君の血と同じ匂いがするのだけど……」

「!」

流石吸血鬼といったところか。

流石に古城の体から血の匂いがするなんて殆ど分からんぞ？

「もしかして君が、獅子の黄金レグルスアウルムの霊媒だったりすんのかな？」

うわあ、察しが良すぎて逆に引くわあ。

でも、こうなると騙すのは至難の技……いや、無理に等しいんじゃないかな？古城。

さて、どうする？

「そんな……まさか」

と、案外驚いている紗矢華ちゃん。

え？もうちゃん付けなのかって？そりゃ古城と呼び方同じになっちゃうもん、みんなが、読みやすいようにだよ。

え？メタイ？知らないなあ。

「そんな事まで分かるのか?!」

おい、古城。

お前隠す気ゼロだな？

「いや、言ってみただけだよ。だけど古城の血の伴侶候補だと言うのなら、僕にとっては恋仇って事になる」

おい、バトラー最初の血は絶対狙っただろ。

「こ、恋仇!」

そして何で反応しとんの雪菜ちゃん、そこはあかんやろ。

「その顔、どうやら本当に……」

おうおう、メツチャニヤケとるやんけ。

しかもこれまた狙って言ってるし……

すると雪菜ちゃんは、強制的に話を変えて来た。

「そ、それより、貴方が来訪された目的をお聞かせ下さい。そうやって第四真祖と如何わしいえにしを結ぶのが目的ですか？」

「勿論」

「即答するな！」

おう…なんか被ったな。

「やっぱ古城と考え同じなんだな、今日に限って」

「そうだな洗夜、俺も丁度同じ事を思っていたよ」

なんでこうなるのかねえ。

「しかし別の目的もある」

と、行成真面目な顔して行って来やがるバトラー、もうギャツプ凄
すぎw

「と、言うところ？」

雪菜ちゃんが質問すると聞き覚えのある名前が飛んできた。

「クリストフ、ガルドシユという名前を知っているかい？」

… やっぱ、今回も面倒事になりそうだな。

と思いつつも俺達はバトラーの話聞く事にした。

次回 戦王の使者VI

戦王の使者VI

「クリストフ・ガルドシュ…確か戦王領域出身の元軍人で少しばかり名の通ったテロリストだったか？」

まあ、そもそもこの絃神島に上陸する事はあの人に聞いていたから然程驚く事ではないな

「ああ、黒死皇派と言う過激派の幹部でプラハ国立選挙事件で、四百人以上の死傷者を出した…」

ほお…ガルドシュは、そこまで手を出してるのか…今回は中々侮れん奴が相手になるな…

「黒死皇派つてのは聞いた事がある…けど、何年か前に壊滅したんじゃないのか？」

「それはd「さつきからの会話からすると、その黒死皇派の生き残りがガルドシュに再建を頼んだのだろう」…流石、察しが良いね絃神洗夜」

ま、そこら辺の察しが良いって評判だからな

「まさか、そのガルドシュがこの島に来てるとか言うんじゃないだろうな？」

「おや？古城の方も察しが良いみたいだね」

「まさか！魔族特区のこの島が簡単にテロリストの潜入を許したと言うのですか?!」

まあまあそう興奮しなさんなや、雪菜ちゃん。

まあ、それでも許したのには少し呆れたけどな。

「さあね、ぼんやりしてたんじゃないのか？」

「…バトラー、少しは口を慎めよ？ここは俺の大事な居場所だ、あんま言い過ぎると切れるぞ？」

流石に自分の居場所の様な場所を悪く言われる筋合いはねえぞ…

「侵入を許した理由？そんなの決まってるでしょ？」

と、いきなり煌坂が割って入って来た。

もう何なんコイツ相手にしてると無駄に疲れる…

「黒死皇派は差別的獣人遊技者達の集団…彼らの目的は聖域条約の破棄と戦王領域の支配権を第一真祖から奪う事…その第一歩で、この魔

族特区で事件を起こし黒死皇派の現在をアピールする……テロリス
トの上等手段でしょ？」

「はあ……また面倒な事になるなあ。」

でも、それはそれでこちらとしては困るから暴れられないように先
に確保しておくのがいいが……

「流石に上手くはいかねえか」

俺がボソツと呟く。

すると古城は煌坂が言った事に不満を感じた様で自分で疑問をぶ
つけていた。

「おい、なんでここなんだよ。魔族特区なんて他にもあるだろ？」

するとバトラーは不敵な笑みを浮かべて俺たちを挑発する様な発
言をしてきた。

「さあてね？」

「バトラー、お前は何を考えいるんだ？」

その質問をすると雪菜ちゃんが続けてこう言った。

「単刀直入に言います。アルデアル公……貴方はガルドシュ暗殺の為
にこの島に来たという事ですか？」

「ははっ！そんな面倒な事はしないよ」

「なに？」

コイツ……自分でなにを言っているのか理解しているのか？とい
うより、あの倉庫のナラクはコイツは知っているのか？

或いは……

「もし、仮にガルドシュの方から仕掛けてきたら……応戦しない訳に
はいかないよ」

「……成る程、奴らを嚇ける為にこんな船でわざわざ乗り込んで来
たというわけか」

「古城……それは恐らく違うぞ」

「……理由を聞かせてもらってもいいかな？古城の友人よ」

「はっ！笑わせてくれる。そもそもお前は戦闘狂だ。どうせ戦う為に
ガルドシュを呼び出す事を目的にこの船をわざわざ用意したんだ
ろうな。……しかも、嚇けるだけなら乗客なんて一切載せているはず

がない」

俺が一通り言い終わると最後にバトラーはこう言った。

「もし、私の身に危険が迫ったら私の眷獣がなにをしてくるか分からないよ？まあ、この島を鎮める位は出来るだろうね……だからね……君に初めに謝っておこうと思つて」

やろう……まさかこの島を本気で鎮める気だな？

そう考えると俺の中で、怒りがふつふつと湧き上がってきた。

それは古城も同じでバトラーに怒鳴り散らしていた。

「デメエ……本気で言つてんのか！」

「……折角ですがそのお気遣いは無用でしょう」

「姫終（雪菜ちゃん）……」

物凄く雪菜ちゃんがかつこよく見えるんだけどさ……ドヤ顔かますと雰囲気壊れちゃうよ？ねえ、壊れちゃうよ？

「どういう事だね？……まさか、古城が僕の代わりにガルドシユを始末してくれるとでも？でも、第四真祖より僕の眷獣のほうがおとなしいと思うけどね」

けっ！どの口が言うんだから。おとなしい眷獣だったら戦闘狂なんて呼ばれるかアホが。

「そうですね……ですが、私が第四真祖に変わつて黒死皇派の残党を確保しm」その必要は無いよ雪菜ちゃん」洗夜さん？」

俺はバトラーの前に立ちはだかり今までにない殺気を放つ。

流石に放ち過ぎるとアイツが起きちまうから、そこまで挑発はできないが、ギリギリまでやってやんよ。

「今回は俺が引き受ける、お前は黙つて見てろバトラー」

「フフツ、果たして君には黒死皇派の残党は狩れるのかな？」

「まあ、見てろつて。古城よりは上手くやつから」

「酷くないか?！」

まあ、獅子の黄金を完全に扱いきれていない古城を出すより俺の方が早く終わるし。まだお前は眷獣が数匹いんだ。いつ出るかも分からんやつを戦わせる訳にはいかねえだろうが。

「フフツこれから楽しみになりそうだ……それと獅子王機関の剣巫、

君が古城の伴侶に相應しいが見極めさせてもらおうよろよろ

その頃浅葱は送られて来たパズルを解き終わり背伸びをしていた。「うーん、これで解析完了つと。挑戦してきた割には齒応えなかつたわね。でも……ナラクヴェーラーってなんだろう？」

その時浅葱の携帯に一通のメールが届いた。

浅葱はベットにダイブしメールを開く。

差出人は基樹からだ。

メール内容は……

『ハニートラップの仕掛け方』

「基樹か……いい加減にしろつての」

スマホをベットに投げ枕に顔を疼くめる浅葱。

「二人だけの秘密……か」

こんな些細な眩きは古城に届く事はなかつた。

場所は変わりオシアナスグレイブ。

バトラーと煌坂が帰っていく二人を見つめていた。

「面白くなりそうだね」

「……」

煌坂の方はなにかを考えておる様だが、明らかにバトラーは楽しん

でいるのが伺える。

「おい、バトラー」

「ん？なんだい、まだ居たのか絃神洗夜」

「いんや、俺も今帰るところだ……」

俺はバトラーの横を通り過ぎる際にこう囁いた。

「お前がこの島を潰すのが早いかな、俺がお前を潰すのが早いかな……試してみるか？」

「……いや、辞めておくよ」

それを聞いた俺はそのままオシアナスグレイブを去っていった。

俺が去っていくのを見送るとバトラーは更に口角を上げた。

その笑みはさながら……悪魔と言った感じだろうか。

「全く……本当に面白くなりそうだ」

洗夜が去った船内で、ある作業員が話していた。

「なあ……この船ってこんな寒かったか？」

「いや、そんな訳ないだろ。ここは常夏の島だ、冷房を入れすぎたんだろ」

片方の作業員は特に気にしていなかったが、もう一人の作業員がとあることに気づいた。

「この船ってここまで滑りやすかったか？」

「さあな……さて、さっさと仕事終わらせるぞ」

そう言って二人の作業員は仕事を開会するのであった。

だが、この船内が寒いのも床が滑りやすくなっているのも全て洗夜の持っているアレがやった事を誰も知らない。